
平成28年度 訪問看護同行研修
・ 振り返り研修の結果報告

実施概要

訪問看護同行研修

実施病院数：4病院（順天堂練馬病院、東海病院、浩生会スズキ病院、田中脳神経外科病院）

参加者数：30名（看護師29名、MSW1名）

協力訪問看護ステーション：12事業所

訪問看護同行訪問 振り返り研修

実施病院数：1病院（東海病院）

実施内容：
・ 同行研修受講者からの発表（3名）
・ 訪問看護ステーションの感想および病院へのメッセージ

参加者数：12名（うち訪問看護ステーションから1名参加）

アンケート回収状況

訪問看護同行研修

受講者（病院職員） 30名中30名（回収率100%）

講師（訪問看護ステーション看護師） 21名

訪問看護同行訪問 振り返り研修

受講者（病院職員） 10人中8名（回収率80%）

同行研修受講者アンケート（1） 受講者（アンケート回答者のみ）属性

- 受講した看護師のうち62%が病棟勤務、38%が外来勤務だった。
- 経験年数が浅い5年目以下の人は37%に留まり、46%が11年以上経験がある人だった。
- 受講者の90%が在宅療養の経験が無い人だった。

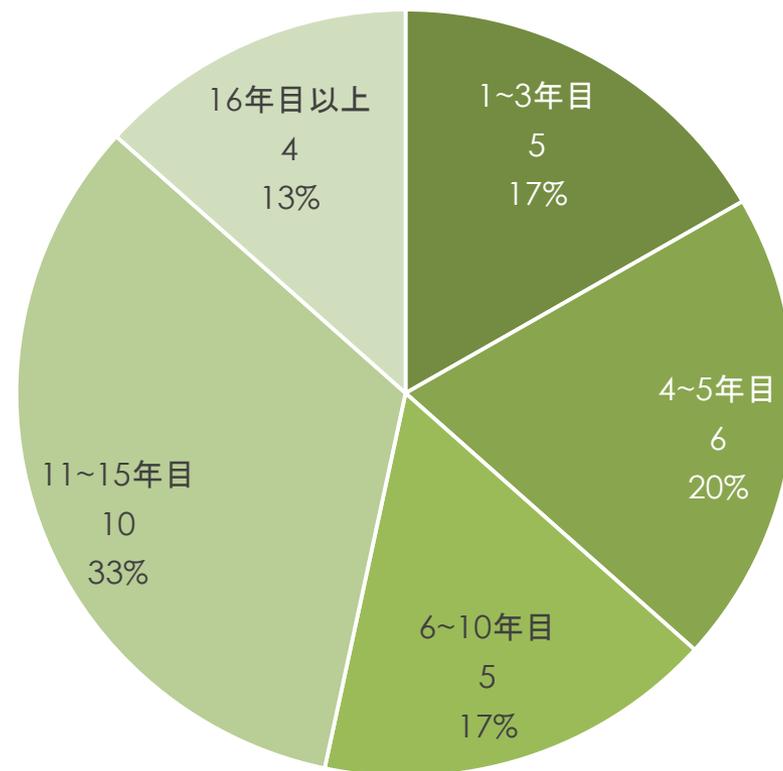
職種

	人数（計30人）
看護師	29人
（病棟勤務）	（18人 62%）
（外来勤務）	（11人 38%）
MSW	1人

在宅療養の現場経験

ある	ない
3人（10%）	27人（90%）

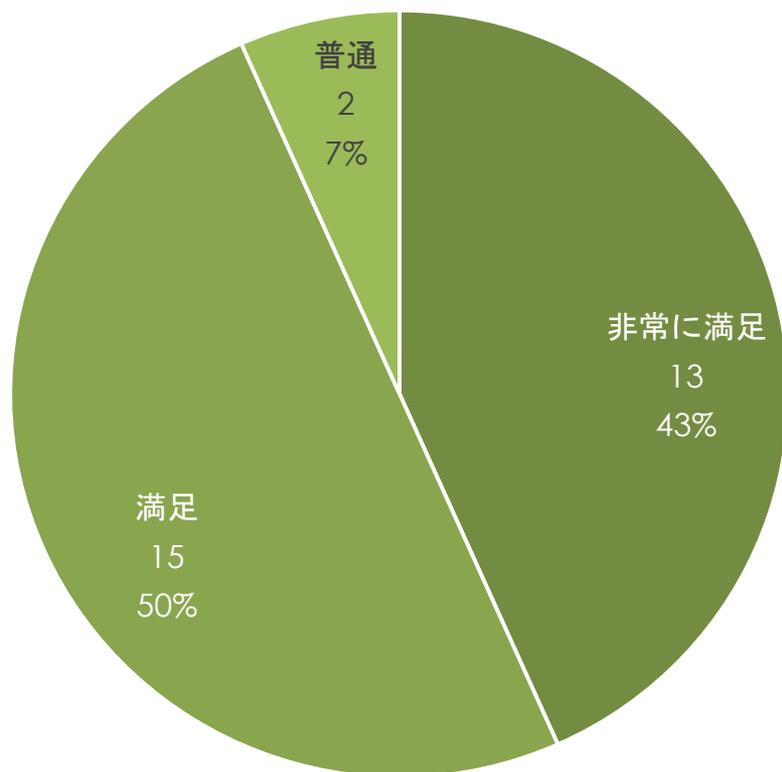
経験年数



同行研修受講者アンケート（２） 満足度

- 受講者の93%が満足したと回答。
- 「普通」と回答した方は、いずれも「研修日数が1日では少ない」との理由だった。

満足度



満足度	人数
非常に満足	13人
満足	15人
普通	2人
不満	0人
非常に不満	0人

同行研修受講者アンケート（２） 満足度（意見の抜粋）

非常に満足

1. 現在の職場で在宅との連携の必要性を感じる機会が多く、実際の訪問看護の場面を知る必要性を感じていたから。(6~10年目,外来)
2. 実際に外来通院されている患者さんの自宅での様子・家族の関わり・提供されている看護について知ることができ、渡している医療物品についても意見交換できた。訪問はなかったが、興味のある分野のケースについて教えていただき、訪問看護がどのように関わっているか学ぶことが出来た。(11~15年目,外来)
3. 実際に自宅で過ごす所を見ることで、福祉用具や家族の協力体勢などの重要性を学ぶことが出来た。(1~3年目,病棟)
4. 病院では治療が終了し、その人にとっての看護は終了したと思いがちであったが、実際は退院して在宅での生活の方が看護の介入が必要なことが多いことに気付いた。また在宅看護の目標は個々によって違い、状況や生活環境により変化することが分かった。(16年目以上,外来)

満足

1. 病院内で働いた経験しかないので、在宅の現場を見ることができよかった。訪問看護での看護師の役割を見ることができて、患者本人と支える家族への支援について外来看護に共通する部分もあり、とても勉強になりました。(11~15年目,外来)
2. 病棟での患者・家族の関わりとはまた違った関わり（コミュニケーション方法や指導方法など）について学べたので良かった。(4~5年目,病棟)

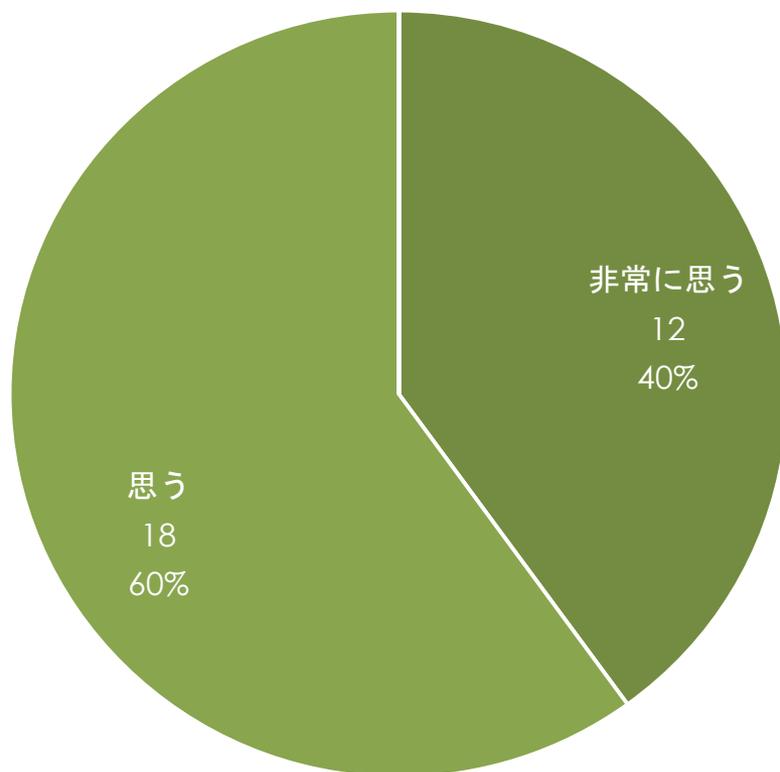
普通

1. 一日では訪問看護について学ぶのに短い気がする。(6~10年目,病棟)
2. 研修が1日のみだったため、数件しか同行できず質疑応答の時間も短く感じたため。(4~5年目,病棟)

同行研修受講者アンケート（3） 在宅療養の理解度①

- 受講した全員が、在宅療養で看ることが出来る患者像のイメージが具体的に became と回答。

（1）在宅療養で看ることが出来る患者像のイメージが具体的に became か？

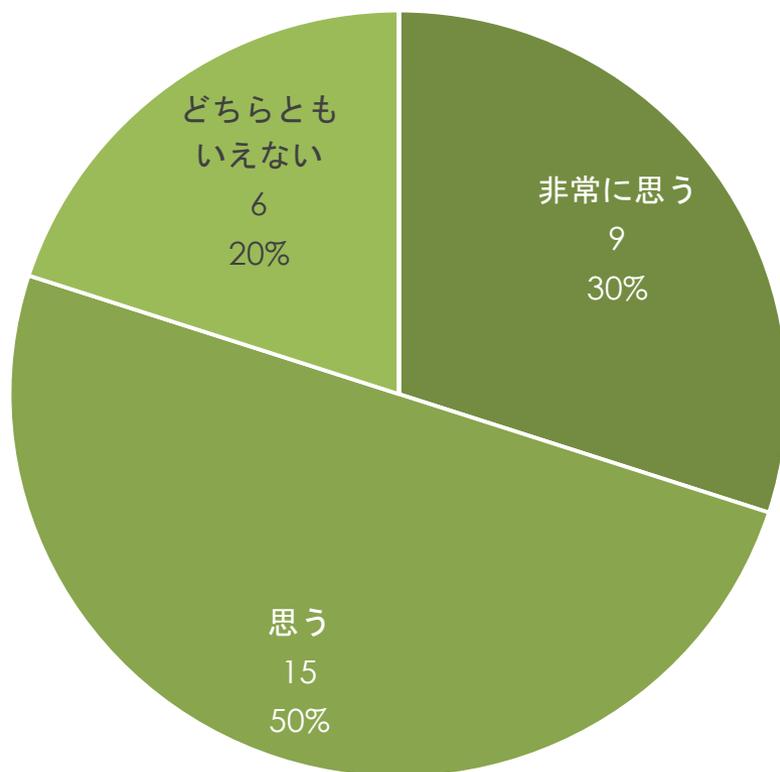


	人数
非常に思う	12人
思う	18人
どちらともいえない	0人
思わない	0人
全く思わない	0人

同行研修受講者アンケート（3） 在宅療養の理解度②

- 80%の人が、在宅側から求める入院中の退院支援について理解が深まったと回答。

（2）在宅療養に携わる方々が求める入院中の退院支援について理解が深まったか？



	人数
非常に思う	9人
思う	15人
どちらともいえない	6人
思わない	0人
全く思わない	0人

同行研修受講者アンケート（４） 普段の業務への活用のイメージ①

- ・ 受講した全員が、自身が普段の業務の中でできることについての具体的なイメージができたと回答。
- ・ 住環境や患者の希望、キーパーソンに関する情報収集のポイントや、退院時カンファや看護サマリー等の情報提供時の工夫などについて、具体的にイメージできるようになったと回答。

あなた自身が普段の業務の中でできることについての具体的なイメージができたか？

イメージできた	イメージできなかった
30人（100%）	0人

具体的な内容（一部抜粋）

1. 在宅療養(特に緩和ケア)へ移行する患者様に対して、どのようなケアを導入するか、具体的に説明、おすすすめ出来るようになった。各訪問看護ステーションにそれぞれ特徴(得意・不得意)があるので、疾患等によって患者に合ったステーションを勧められるようになると思う。(6~10年目,外来)
2. まずは自分の研修経験を職場スタッフへ話すことで他のスタッフへも訪問看護の関わりを意識づけしていく必要がある。入院時に退院時を見据えた考えをもつことで具体的に必要な項目をピックアップすることができる。(11~15年目,外来)
3. 介護申請を早めにしてもらう。(1~3年目,病棟)
4. 救急外来へ受診した際に知り得た情報をカルテに残すことで情報提供できるのではと考えました。(11~15年目,外来)
5. 在宅環境や介護体制、患者・家族が何を望んでいるかしっかり情報をとること。(4~5年目,病棟)

同行研修受講者アンケート（４） 普段の業務への活用のイメージ②

続き。

7. 実際に患者さんと接する時間は短いですが、内服のコンプライアンス、患者・家族の不安や質問など情報を収集して在宅医療の介入が必要な方を見つけ連携していけるようにしたい。(11~15年目,外来)
8. 積極的な意見交換を行う機会を持ち続ける事と、在宅環境に興味を持ち、家族背景を含め情報収集を怠らない事。ADLの適切な評価を行い、在宅ではどう活かせるか想像し、入院中に介入することも業務内で行いたい。(11~15年目,病棟)
9. 退院カンファレンス時や、看護サマリーに記載する内容を具体的に考えることが出来るようになったと思う。(16年目以上,病棟)
10. 退院調整が必要な患者に対し、紙面（サマリー）だけでなく、電話など直接やりとりすることが重要。(4~5年目,病棟)
11. 入院時より在宅へ帰ることを念頭において患者・家族指導に望むことが大切であると感じた。また、カンファレンスの際に有効な情報共有が出来るよう準備(チームスタッフで話し合う等)が必要であると感じた。(4~5年目,病棟)
12. 入院中であっても退院後の生活で不安なことを聞くなど、家の構造、家族構成、キーパーソンなど重要情報を聞くことは出来ると思った(1~3年目,病棟)
13. 病棟への申し送りや退院指導までの間に、支援できる制度etcを含めて連携する必要があると思った。また、指導して頂き、どのように家族や患者に支援を求めるのかを教えてあげられると思った。(6~10年目,外来)
14. 現在、訪問看護を利用していない。その制度を入れるためにどうすればよいかを案内していく。在宅ケアをしている人にはそれに沿ったケアを病院でも可能な限り提供できるようにしていく。入院する場合には今後の在宅へ向けて聴取できた情報を病棟へ引き継ぎしていく。(11~15年目,外来)

同行研修受講者アンケート（5） 連携の円滑化

- 87%の人が本事業を実施した訪問看護ステーションとの連携の円滑化につながると感じた。

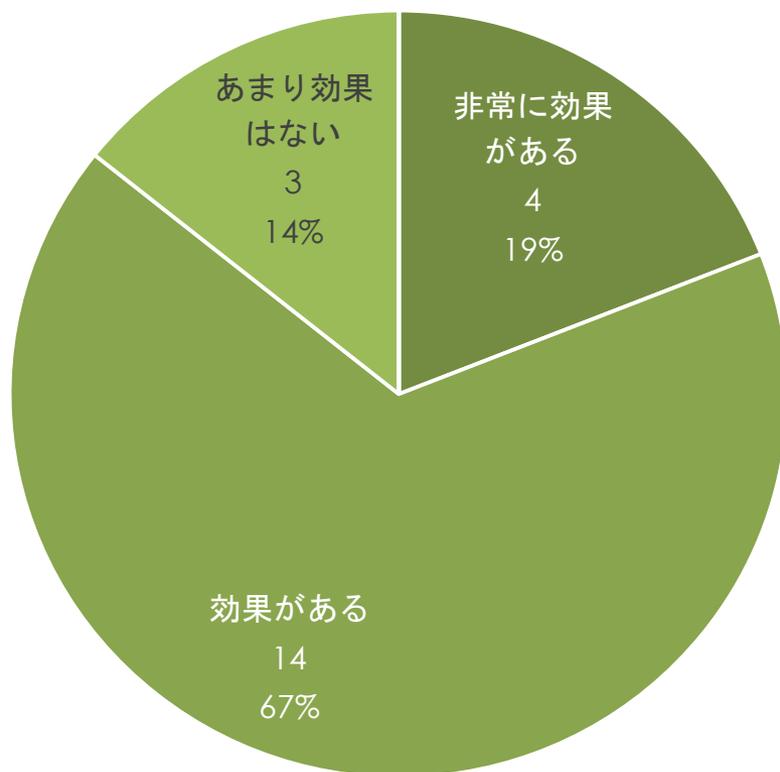
病院と訪問看護ステーションとの連携の円滑化につながると思うか？

	本事業を実施した訪問看護ステーション			地域の訪問看護ステーション		
	人数	割合	累積割合	人数	割合	累積割合
非常に思う	7人	23%	23%	6人	20%	20%
思う	19人	63%	87%	16人	53%	73%
どちらとも いえない	4人	13%	100%	8人	27%	100%
思わない	0人	-	-	0人	-	-
全く思わない	0人	-	-	0人	-	-

同行研修講師アンケート（1） 連携の円滑化

- 講師（訪問看護師）の86%が、在宅スタッフと病院スタッフの連携の円滑化に効果があると回答。

在宅スタッフと病院スタッフの連携の円滑化に効果があるか？



	人数
非常に効果がある	4人
効果がある	14人
あまり効果はない	3人
効果はない	0人

同行研修講師アンケート（2） 準備・実施にあたっての課題等

準備・実施にあたっての課題等（抜粋）

あった	なかった	無回答
9人	11人	1人

- 何を主に研修してもらおうかで選びづらかった。
- 今回の研修で何を知りたいのか等、学習目標が事前に具体的に知ることが出来ていると準備しやすいと思いました。
- 今回の研修に来ていただいた方は参加が2回目？3回目？ということでだいたいの基本的なことは知っていたので、来る方の情報も事前にいただけると有難いかと思いました。
- 事前に連絡がなく研修期間etcの詳細な情報がなく研修の内容についての打ち合わせが直前になってしまった。
- 自ら希望して同行研修を受ける人と、病院から言われて仕方なく研修を受ける人では、モチベーションに差があり。教える(伝える)内容が変わってきます。できれば希望をされている方、もしくは目的をもって来られる方をお願いしたいです。
- 同行先の患者、家族の同意を取ることに苦労があった。
- 訪問前に情報提供（利用者様の）は状態が変化してしまったりで思うように提供することができなかった。
- 前に同行研修を受けた時のやり方と変わっており、最初は戸惑いました。方法の統一が望ましいと思います。

振り返り研修参加者アンケート（1） 退院連携強化に向けた効果

- 振り返り研修参加者の50%が、「普段の業務の中でできることについての具体的なイメージができた」と回答。同行研修と比較して低い水準となった（同行研修は100%）。
- 参加者全員が訪問看護をはじめとした在宅療養に関する理解が深まったと回答。

在宅療養の現場経験

ある	ない
1人（13%）	8人（88%）

あなた自身が普段の業務の中でできることについての具体的なイメージができたか？

イメージできた	イメージできなかった	無回答
4人（50%）	3人（38%）	1人（13%）

在宅療養で看ることが出来る患者像のイメージが具体的に変わったか？

在宅療養に携わる方々が求める入院中の退院支援について理解が深まったか？

	人数	割合	累積割合		人数	割合	累積割合
非常に思う	0人	-	-	在宅療養に携わる方々が求める入院中の退院支援について理解が深まったか？	1人	13%	13%
思う	8人	100%	100%		7人	88%	100%
どちらとも いえない	0人	-	-		0人	-	-
思わない	0人	-	-		0人	-	-
全く思わない	0人	-	-		0人	-	-

※同行研修参加者の3名を含む

次年度の方向性

平成28年度の実施結果および平成29年度の方向性

- 研修生の数は平成27年度から増加。同行研修は参加者の満足度および通常業務への波及効果ならびに訪問看護ステーション側の期待度も非常に高い。
⇒ 当該研修の周知等により、引き続き参加病院数および参加者数の増加を目指す。
- 研修生に関する情報を訪問看護ステーションと事前に情報共有することで、相互にとってより良い研修内容となる。
⇒ 研修生の同行に関する希望や研修生自身の情報を事前に訪問看護ステーションに提供する仕組みを検討する。
- 研修を受け入れてくれる訪問看護ステーションの負担を軽減することで、持続性のある研修になっていくことが期待される。
⇒ 研修の準備等に係る手順をマニュアル化し、研修の手続きの見える化を推進する。
- 同行研修後も継続してインプットやアウトプットをしていくことで研修生の学びが推進されることが期待される。
⇒ 振り返り研修の実施や事例検討会への参加など、同行研修後の継続学習の方法を引き続き検討していく。